

アラサーバックパッカー 欧州紀行

■16■

EPILOGUE

まつむらえいこ

EPILOGUE

「なくしたものは靴下を片方と洗濯ばさみが一個だけ」

シャルル・ド・ゴール空港を発った飛行機はフランクフルト、ドバイを経由してクアラルンプールに着いた。ここで一泊。市内を見る時間は充分にあったにもかかわらず、ラヴェンナでと同様ホテルから一步も外へ出なかった。出られなかった。疲労があまりに激しくて、ただ眠ることしか考えられなかったのだ。

ドバイ空港でチャドル用の美しい生地を買ったら日本製だったこと、飛行機で隣に座ったのが父娘ほどにも歳の違うアラブ人夫婦で、この幼妻が目に余るほど傍若無人だったことを除けば、さしたる事件はなかった。

そして翌日クアラからタイペイ経由で、成田に戻ってくる。行きとは逆に驚く早さで時間が過ぎ日付が変わった。成田に着いてみると、そこを発ってからちょうど五週間が経っていた。

ひとりで五週間欧州旅行をしたといえ、さぞかし外国語が達者だろうとかお金持ちねなどと言われるけれど、それは全然当たっていない。満足に話せるのは日本語だけで、あとは、大和民族の知性を疑わせるような言動をそこかしこで披露してきてしまった。

さらに救いようのない方向音痴で、たえず道に迷っていた。わざわざ道に迷うためにヨーロッパくんだりまで出かけていったような気さえする。寝坊して飛び出して道に迷って、毎日がそんなことの繰り返し。ただただ他人様のお情けにすがりながら歩いてきた。旅に出ると、いかに自分が何もできない卑小な存在であるかがわかる。

助けてくれる誰かがいて、初めて生きていけるのだとよくわかる。また一方で、いかに自分がしたたかな生き物であるかもわかる。いざというときにはどれだけのことをするのかがよくわかる。お金を持たずにいると、なおさらわかる。

どちらかという滞在型の旅行が好きだったから、こうして各地を転々と移動する旅は不安だった。結局どの街の印象も散漫になってしまうのではないか、移動ばかりに時間をとられて街をただ通り過ぎることにならないか、そうかといってあまりひとところに長くいたら退屈して時間を無駄にしはしないか。そんなことを考えるとスケジュールの組み方もよくわからなかった。

結果的には、ひとつの街に三、四日という日程は悪くないペースだったと思う。その街に入った初日は、右も左もわからずとても不安だ。それが二日目、三日目と日経つにつれて金銭感覚と方向感覚が身についてきて俄然面白くなってくる……と同時に少し退屈してくる。そこで後ろ髪をひかれるようにしてその街をあとにする。もちろん、その場所の本質に迫ろうと思ったら時間は足りない。でも、その街を楽しんで何かを感じるくらいのことではある。

30歳近くなってこんな旅をしていても自慢にはならないかもしれない。基本的にこれは学生の旅の仕方だ。でも同じような旅をしている同年代の女性にほうぼうで出会った。何人もの女性がバックパックをかついで単身ヨーロッパを歩き回っている。学生時代は親に許してもらえなかったからなのか、いま初めてそうしたいという

欲求が芽生えたからなのか、それはわからない。わかるのは、お金がないから仕方なくそうしているのではなくて、積極的にそのような旅を選んでいるということだ。優雅なドレスを着てオペラを楽しむのではなく、浜辺に寝そべって男性の誘いを待つのもなく、円高差益を利用して高級バッグを手に入れるのもなく、わざわざ靴のすり減るような旅を選んでいる。

わたしも歩いた。どこへ行くにもひとの二、三倍は歩かなければきちんとたどり着けないわたしだから、ほんとうによく歩いた。成田に戻ったとき、靴に底が残っていたのが不思議なくらいだ。そしてよく食べた。よく眠った。食べることと眠ることが明日の体力になるのだという実感があった。それは、飢えたことのないわたしにとってそれなりに新鮮な体験だった。

何はともあれ、こうして無事に帰ってくることができてよかった。素直に神様に感謝してみたい。でもそれは、アラールの神様ではなく、キリスト教の神様でもなく、アルプスの山に宿っていたと考えられる神様でもなくて、おそらく日本のどこかの神様が、連れのいないわたしのために海外出張してきてくれたのだろうと、そんなふうに思える。

帰国してしばらくすると冒頭に述べたバーニーから手紙が来て、奇しくもわたしがクアラのホテルでのびていた頃、彼女もちょうど里帰り中で同じ町にいたことがわかり、互いに会えなかったのを悔しがった。

また、イスタンブールのレストランでにぎやかな応対をしてくれたオスマンさんから手紙が来て、これは軍

用の便箋だったのでびっくりした。兵役を務めている最中で、それを終えたらお嫁さんを探すのだと、記憶にある彼からは想像もできない真面目なというかしんみりした調子で書かれていた。

そんなこんなで、言葉にするのは難しいとりとめのない物思いに帰国後もときおりふけったりしながら、身体のほうは新しい日常の中にのみ込まれていった。実を言えば、成田を発つ前の夜、失業中に書いて応募した小説が新人賞に選ばれたと文芸誌『海燕』から連絡を受けたのだった。そのときの気持ちは嬉しいというよりも恐ろしいといったほうが当たっている。この新人賞はわたしにとってとても重い意味を持っていたからだ。だから、この旅はほんとうのところは〈休暇の総決算〉から〈一時的な執行猶予〉ないしは〈現実逃避〉へと、出発直前になってその意味合いを変えていた。旅先ではずっと新人賞について考えることから逃げていた。それを考えないようにするためなら他の何だって考えられた。そもそもこの旅のプランニングは、応募作品の当落を思って緊張するのを回避するためにしていたのだとも言える。どこへ行こうかとか飛行機はどれにしようかとか、そんなことを考えていれば余計なことは考えなくても済むからだ。

ようやく、現実に向き合うことができるようになったのは、帰りの飛行機の中で朝日新聞を手にしたときだ。ちょうどその日の新聞に、『海燕』の広告が載っていて、自分の名前が目に入った。帰国して一週間後が授賞式だ。すべてが恐ろしいようなタイミングのよさだった。だから、この現実を受け入れることができたのかもしれない。

多分、この旅は〈覚悟を決める〉ための時間をわたしに与えてくれたのだらうと思う。ひたすら逃げているつもりでも、意識下では着々と何かが進行していたのかもしれない。

全体としてよい旅だった。得たものは多かったけれど、なくしたものは靴下を片方と洗濯ばさみが一個だけだった。

おわり

● 行程 ● 1990年

- 9月12日 成田
ドバイ
- 9月13日 イスタンブール
- 9月16日 アテネ
- 9月17日 サントリーニ島
- 9月21日 パトラス
- 9月22日 ブリンディシ
- 9月23日 ローマ
- 9月25日 ミラノ
マントヴァ
- 9月26日 ラヴェンナ
- 9月28日 サン・マリノ共和国
ラヴェンナ
- 9月30日 ヴェネチア
- 10月2日 サン・モリッツ
- 10月6日 フェッセン
- 10月9日 ミュンヘン
- 10月10日 パリ
モン・サン・ミシェル
- 10月11日 パリ
イリエ・コンブレ
- 10月15日 (フランクフルト)
(ドバイ)
- 10月16日 (クアラルンプール)
- 10月17日 (成田)

アラサーバックパッカー欧州紀行 ■完全版■目次

1	PROLOGUE	
2	成田ーイスタンブール篇	「えーっと、イラクがどうしました？」
3	アテネーサントリーニ島篇	「もしかしたら、ずっとナンパされ続けていた？」
4	アテネ篇	「世界一美しい島に住むダメダメな奴ら」
5	パトラス〜プリンディシ航海とローマーミラノーマントヴァ篇	「この国の先行きが不安だ」
6	ラヴェンナ篇	「海を渡り、夜行に揺られ」
7	サン・マリノ共和国篇	「小さな紳士と輝くトイレ」
8	ヴェネチア篇	「妄想中世騎士道物語」
9	サン・モリッツ篇	「街の灯りは紫色」
10	ノイシュバンシュタイン城篇	「靴底が破れても雪山に行く（はめになった）」
11	リンダーホーフ城篇	「年下の男の子を誘惑する（つもりなんかなかった）」
12	ヘレンキームゼー城篇	「日本の女の子たちが世界中を旅している」
13	モン・サン・ミシェル篇	「もうダメかと思ったとき力は目覚める」
14	イリエ・コンブレ篇	「お尻がこそげてなくなるほど自転車を漕ぐ」
15	パリ篇	「プルースト『失われた時をもとめて』をもとめて」
16	EPILOGUE	「何者でなくても許される街」
		「なくしたものは靴下を片方と洗濯ばさみが一個だけ」

アラサーバックパッカー欧州紀行 ■16■ E P I L O G U E

<http://p.booklog.jp/book/54781>

著者：松村栄子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/eikomatsumura/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/54781>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/54781>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ